死刑制度！本当に必要でしょうか？

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」
東京都荒川区南千住一－五九－六－三〇二
http://sobanokai.my.coocan.jp/

世界の多くの国々が制度としての死刑を廃止する中、先進国を自称するこの国はいまだに「死刑制度」を堅持しています。それは世論の八〇・八％（二〇一九年、内閣府の調査）という多くの人々が「死刑もやむを得ない」と考えているからだと言います。

その理由を以下の四点にまとめています。

① 凶悪な犯罪が増える（四六・三％）
② また同じような罪を犯す危険がある（四七・四％）
③ 凶悪な犯罪は命をもって償うべき（五三・六％）
④ 被害を受けた人やその家族の気持ちが収まらない（五六・六％）

このビラを受け取られた皆さんも、その通り！とお考えかも知れません。

でも、ちょっとお待ちください。この四つはいずれも感情論、もしくは直感的・感覚的な予断と言えるのではないでしょうか。その理由を以下に述べます。

まず、①を見てみましょう。死刑制度には犯罪の抑止効果があるので、死刑がなくなると「凶悪な犯罪が増える」ということでしょうが、これは世界のどこの国でも証明されていないというのが事実です。

次に②ですが、再犯の危険があるから殺してしまえ、というのはあまりに乱暴な話です。どんな凶悪な犯罪者であっても更生の可能性はありますし（その事例は数多くあります）、死刑でなくとも終身刑であれば再度の犯罪を完全に防止できるはずです。

また、③の「命をもって償うべき」という考えですが、犯罪者の命を奪っても被害者の救済にならないし、いかなる人であっても生命に対する権利＝生きる権利は守られるべきと考えます。

最も根深い問題は、④の被害者遺族の感情であろうと思います。これが死刑存置の最大の理由になっているからです。これについては、命と感情を天秤にかけるのは理不尽であるとの意見もあります。殺人では被害者本人はいませんから、遺族の方の感情ということになります。ただ、加害者を死刑にしても遺族の悲しみは消えるものではありません。これでは天秤にかけられません。それらは別次元のものだからではないでしょうか。被害者遺族の思いは、加害者の生死に関わらず消えるものではありません。それに今日では遺族のない被害者もいます。そういう意味でも被害者感情を盾にするのは無理があります。

因みに、生命の絶対的尊重という観点からEUでは死刑廃止を宣言しています。

いずれにしろ、このように①～④を客観的に分析していたなら、世論調査の結果はもっと違ったものになっていたのではないでしょうか。

死刑制度を廃止すべき理由は他にもあります。人が逮捕し人が裁くのですから、冤罪や誤判の危険性がぬぐい切れません。冤罪の人を死刑執行してしまったなら、取返しがつきません。これはこの制度を支えている我々の責任であることも肝に銘じておく必要があります。

また、一方で死刑廃止は世界的な潮流であり、今ではアフリカの国々も廃止の方向に舵を切っているのです。自称先進国の名に恥じないよう、遅ればせながら、我々も死刑制度の廃止を考えることから再出発すべきではないでしょうか。（T・K）

№311/2023/11/18